

## 平成 20 年度戦略的創造研究推進事業における 新規発足領域及びその研究総括の決定について

戦略目標が文部科学省によって提示されると、研究主監会議の審議を経て研究領域が選定され、研究総括が指定されます。

標記の件については、平成20年3月17日および5月7日に開催された研究主監会議において、基礎研究に係る課題評価の方法等に関する達に基づいて審議され、下記のとおり承認されました。これを受け、下表の研究領域が選定され、研究総括が指定されました。

戦略目標	研究領域	研究総括
最先端レーザー等の新しい光を用いた物質材料科学、生命科学など先端科学のイノベーションへの展開	<u>CRESTタイプ</u> 先端光源を駆使した光科学・光技術の融合展開	伊藤 正 (大阪大学大学院基礎工学研究科物質創成専攻 教授)
	<u>さきがけタイプ</u> 光の利用と物質材料・生命機能	増原 宏 (奈良先端科学技術大学院大学物質創成科学研究科 客員教授)
プロセスインテグレーションによる次世代ナノシステムの創製	<u>CRESTタイプ</u> プロセスインテグレーションによる機能発現ナノシステムの創製	曾根 純一 (日本電気(株)中央研究所 支配人)
	<u>CRESTタイプ</u> プロセスインテグレーションに向けた高機能ナノ構造体の創出	入江 正浩 (立教大学理学部 教授)
	<u>さきがけタイプ</u> ナノシステムと機能創発	長田 義仁 (独)理化学研究所基幹研究所副所長)
持続可能な社会に向けた温暖化抑制に関する革新的技術の創出	<u>CRESTタイプ</u> 二酸化炭素排出抑制に資する革新的技術の創出	安井 至 (JST 研究開発戦略センター 研究システム G シニアフェロー)
花粉症をはじめとするアレルギー性疾患・自己免疫疾患等を克服する免疫制御療法の開発	<u>CRESTタイプ</u> アレルギー疾患・自己免疫疾患などの発症機構と治療技術	菅村 和夫 (東北大学 副学長、医学系研究科長)
運動・判断の脳内情報を利用するための革新的要素技術の創出	<u>さきがけタイプ</u> 脳情報の解読と制御	川人 光男 (株)ATR 脳情報研究所 所長)
多様で大規模な情報から『知識』を生産・活用するための基盤技術の創出	<u>さきがけタイプ</u> 知の創生と情報社会	中島 秀之 (公立はこだて未来大学 学長)

## 研究領域

### 1. 「先端光源を駆使した光科学・光技術の融合展開」(CREST)

### 2. 「光の利用と物質材料・生命機能」(さきがけ)

本研究領域は、光を利用している情報通信、ナノテクノロジー・材料、ライフサイエンス、環境・エネルギー等の戦略重点科学技術分野の研究者が、最先端レーザー等の発生原理・性能・計測法に精通した光源開発者の支援を得ながら、特色ある光を徹底利用した研究を推進することにより先端科学技術を加速的に牽引し、「物質と光の係わり」に関する画期的なイノベーションを生み出すことを目標に推進されるものである。

研究領域 1 においては、最先端レーザー等を異なる戦略重点科学技術分野で利用する研究者同士が連携することや光源を知り尽くした開発者の支援を得ることによって、「物質と光の係わり」に関して、個別分野における一過性の成果獲得に留まらず、未踏の先端科学技術を先導し、異分野へも波及し得るような、光科学・光技術のイノベーション基盤創出に資する研究を対象としている。これは最先端レーザー等の利用研究者が光源に関して高度な技能や知見を有する協力者を得て推進することが必要であり、CREST として選定することが適切である。

研究領域 2 においては、最先端レーザー等を他に類のない方法で活用する研究や戦略重点科学技術分野の重要な課題に対して徹底的に光科学技術にこだわって研究を推進することにより、未知未踏分野の開拓と新しい研究の方向性を創出するとともに、将来の光源開発に向けて高度な要求を顕在化することが期待できる。これは独創的で新しい発想によって、挑戦的に推進することが必要であり、さきがけとして選定することが適切である。

以上2つの研究領域は戦略重点科学技術分野における光科学技術利用研究を主体的に推進するプロジェクトであるが、文部科学省による光源・計測法等の研究開発等を実施する研究拠点公募型プロジェクトと連携することにより、先端科学技術全体に貢献する基盤を形成することも十分に意識されており、戦略目標の達成に向けて適切に選定されている。また広範な分野を対象としつつも光科学技術の利用展開による新潮流創成型の研究を条件としていることから、斬新で優れた研究提案が多数見込まれる。

## 研究総括 伊藤 正

伊藤正氏は、超微粒子・薄膜の光物性、光機能性材料、近接場分光等の光と物質の相互作用に関わる基礎研究から新しい光機能物質を開発する応用研究まで幅広い研究を着実に展開しており、関連分野の研究者から信頼されており、本研究領域を推進するのに必要な知見・先見性・洞察力を十分に有していると見られる。

また、最先端の光科学技術に関する ERATO 等の評価委員や日本学術振興会の審査委員として、極めて適切な評価と公平な選考を行っており、さらには長年にわたり大阪大学大学院基礎工学研究科 副研究科長、ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構企画推進室 室長を務めていることから特定の分野に偏らない視野を有していると見られ、広範な各分野の専門家である領域アドバイザーの支援を適切に得ながら、それらを総合して統率し、マネジメントを柔軟に行う能力を有していると見られる。

なお、本研究領域の研究総括は通常の研究領域運営に加え、文部科学省による光源・計測法等の研究開発等を実施する研究拠点公募型プロジェクトのプログラムディレクター・プログラムオフィサー・採択拠点チーム研究者等と密接に連携を取りながら、必要な支援を要請することや光源の仕様についての要望を提示し協働することにより、利用研究と光源開発の加速・展開をもたらす役割を担うことも求められている。同氏はこれまでも独自に光源を改良して、その利用を図る研究を展開してきたことや、基礎的な理論・実験研究と応用技術開発の連携を着実に敷衍してきたことから、本研究領域を推進するに際して、すぐれた調整能力を発揮すると見られる。

## 研究総括 増原 宏

増原宏氏は、光化学、マイクロナノ分光、極微化学における先駆的な研究活動を展開し、その成果により日本

化学会賞、ポーターメダル、日本分光学会学術賞など多くの受賞歴をもち、最近ではレーザーの医療・バイオ分野への応用にも研究の幅を広げていることから、本研究領域を運営するのに必要な知見・先見性・洞察力を十分に有していると見られる。

また、多くの優れた研究者を育成してきた実績と光化学協会、応用物理学会、レーザー学会、日本化学会、アジア光化学協会等の学協会要職を歴任してきたことから関連分野の研究者から信頼されており、本研究領域の研究者への指導力とマネジメントを行うに適した経験・能力を有し、公平な評価を行っていると見られる。

なお、本研究領域の研究総括は従来の研究総括とは異なり、文部科学省で実施される光源・計測法等の研究開発等を実施する研究拠点公募型プロジェクトのプログラムディレクター・プログラムオフィサー・採択拠点チーム研究者等と密接に連携を取りながら、必要な支援を要請することや光源の仕様についての要望を提示し協働することにより、利用研究と光源開発の加速・展開をもたらす役割を担うことも求められている。同氏は本戦略目標を提示する契機となった光科学技術の推進に関する懇談会に利用研究者側の委員として積極的に関与したほか、学会活動等の要職を務めた経験から、本研究領域を推進するに際して、すぐれた調整能力を発揮すると見られる。

## 研究領域

1. 「プロセスインテグレーションによる機能発現ナノシステムの創製」(CREST)
2. 「プロセスインテグレーションに向けた高機能ナノ構造体の創出」(CREST)
3. 「ナノシステムと機能創発」(さきがけ)

本研究領域は、従来からの技術的蓄積のあるトップダウンプロセスと、今後の発展が大いに期待されるボトムアッププロセスについて、それぞれの高度化を一層推進するとともに、それらプロセス技術の様々な組み合わせを試みることで、次世代ナノシステムの創製を目指す研究を対象としている。

研究領域 1 においては、トップダウンプロセスとボトムアッププロセスとの融合により、革新的な機能を発現する次世代ナノシステムの構築を目指すことに重点を置いた研究を、異分野融合を強く意識した CREST によって推進される。

研究領域 2 においては、次世代ナノシステムの創製を強く意識しつつ、制御性と拡張性に課題を抱えるボトムアッププロセスに、生体模倣などの新たな手法を取り込むことにより、システムのキー要素となる自立した機能材料を創出する研究を、異分野の研究者が高度な協同作業で実施する CREST によって推進される。

研究領域 3 においては、個人の独創的な発想を活かし、次世代ナノシステムの創製に向けた高次機能を創発するモノづくりを目指したさきがけによって推進される。

以上の通り、CREST においては2つの異なるアプローチによりそれぞれの特質を生かした研究領域で構成されていると共に、これら研究領域が有機的な相乗効果を持って運営されることが期待される。あわせて、広範な分野の中から次世代ナノシステムへのトリガーとなるべき機能創発を目指す独創的研究を取り上げるさきがけが選定されている。これら3研究領域が総合的かつ相補的に対象分野を満たすように考慮されており、より複雑な構造や高い機能を有する次世代デバイス・システムの創製を目指す戦略目標の達成に向けて適切に選定されている。また、上記の通り様々なアプローチ、分野からの革新的提案が期待できるべく考慮されており、いずれの研究領域においても幅広い分野から多様な研究についての優れた研究提案が、多数見込まれる。

## 研究総括 曾根 純一

曾根純一氏は、NEC 中央研究所、基礎研究所において情報技術を中心とした基礎研究に携わり、半導体デバイスのみならず超伝導デバイス、量子デバイスなど次世代デバイスの研究開発に第一線の研究者として貢献してきた。近年では、基礎研究所所長、基礎・環境研究所所長、中央研究所支配人を務め、基礎から応用まで研究開発全体の指揮を取ってきている。特に、パソコン筐体向けのバイオプラスチックや、自動車向けリチウムイオン電池など既に製品化までこぎつけた研究開発プロジェクトを統括するなど、幅広い技術分野で活躍してきた。このような背景から、同氏は本研究領域について先見性・洞察力を有し、また適切なマネジメントを行う経験・能力を有していると思われる。

また、国際固体素子・材料コンファレンス(SSDM)論文委員長、ナノ学会副会長などナノテクノロジー分野と関連の深い学会において要職を歴任、さらに東京大学ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構客員教授および京都大学工学系研究科特命教授を兼務するなど関連するアカデミアへの貢献も大きい。

以上を総合すると、関連分野の研究者から信頼され、公平な評価を行いうることが期待される。また、研究領域全体を俯瞰し強力なイニシアチブを発揮することが求められる CREST の総括として適任と思われる。

## 研究総括 入江 正浩

入江正浩氏は、分子光化学、フォトクロミズム、光反応結晶、単一分子フォトニクス、光応答性高分子、非線形光学材料など、有機化学、高分子化学を基礎とする広範な機能性材料の分野で卓越した研究成果を挙げ、平成 19 年には、これらの成果に対し紫綬褒章を受章している。さらに、フランス LVMH 財団からダヴィンチ賞、ボルドー大学から名誉博士号を授与されるなど、その活躍の場と名声は世界に広がっている。これらのことから、本研究領域について、先見性・洞察力を有していると思われる。

また、光化学協会会長の他、日本化学会の監事、理事、副会長など学会の要職を歴任、さらには、旧通産省プロジェクト次世代産業基盤技術開発「光反応材料」の推進委員長をはじめ多数の国際シンポジウムを組織委員長として成功させており、本研究領域のマネジメントを行うに適した経験・能力を有していると思われる。これらを総合すると、関連研究者から信頼され、公平な評価を行いうると見られる。

## 研究総括 長田 義仁

長田義仁氏は、高分子ゲルを用いた人工筋肉の研究で世界的に高い評価を得ており、「創発」をキーとした分野横断的な研究を展開している。高分子学会賞、日本化学会学術賞、高分子化学功績賞を受賞するなど優れた研究実績を有し、本研究領域において先見性・洞察力を有していると思われる。

高分子学会副会長や日本MRS常任理事を歴任するなど、関連分野の研究者からの信頼も厚いと思われる。

また、北海道大学では、理事・副学長兼知的財産本部長を経験されており、理化学研究所では、九州大学、北海道大学、大阪大学と連携した「分子情報生命科学」研究の中心的役割を果たしており、我が国の世界トップレベル研究拠点(WPI)プログラムのプログラムオフィサーでもあることから、本研究領域のマネジメントを行うに適した経験・能力を有していると思われる。

さらに、平成 17 年度からの「構造制御と機能」領域のアドバイザーとなるなど若手研究者の人材育成にも大いに貢献している。

これらを総合すると、本研究領域のように多くの若手研究者の応募が見込まれるさきがけ研究領域の研究総括として適任と思われ、また公平な評価を行いうると期待できる。

## 研究領域 「二酸化炭素排出抑制に資する革新的技術の創出」(CREST)

本研究領域は、温暖化抑制に関して高いポテンシャルを有する日本の研究水準、技術開発水準、産業技術力を基に、直接的、間接的 二酸化炭素排出抑制技術を、新概念、新原理に立脚して創出することで低炭素社会の実現を目指す先端科学的な研究であり、且つ環境研究であるとの視点から、実社会との接点をしっかり認識して推進する研究を対象としている。また、主としてエネルギー供給側の技術全般を対象として想定しているが、省エネルギーを意図した需要側技術であっても、革新的であり、且つ社会へのインパクトの高いものであれば対象としている。

本研究領域では、我が国が提案した 2050 年までに世界の温室効果ガスの排出を削減するという目標に向け、再生可能エネルギーにおける画期的な性能向上を実現しうる技術、さらには、大気中の二酸化炭素の革新的な処理を可能とする技術、等の直接的、間接的に二酸化炭素排出抑制に資する技術を、新概念、新原理に立脚して創出することを目指す研究を推進することとしている。ただし、単に技術的に優れた先端科学的研究であるだけでなく、研究代表者のマネジメントの下、基礎研究成果を社会に還元することを強く意識したチーム体制での研究を推進することとしている。以上のことと併せ、研究チームに研究の先端性・社会性・俯瞰性を同時に要求することにより、本研究領域では、実用化が強く意識され、現在の産業構造やエネルギーインフラ構造の枠組みにイノベーションをもたらすことが可能な二酸化炭素排出抑制に関する技術シーズ創出が期待でき、戦略目標の達成に向けて適切に選定されている。

また、二酸化炭素排出抑制に資する技術は多様な研究分野に渡っており、太陽電池、二酸化炭素処理技術、バイオエネルギー等を利用した技術をはじめ、対象となりうる研究分野の研究者数は多い。我が国の地球温暖化抑制に対する意識の高まりも相まって、様々な分野からの優れた挑戦的な研究提案が多数見込まれる。

## 研究総括 安井 至

安井至氏は、無機材料科学分野を基礎としながら、総合的な環境研究の分野でも鳥瞰型環境学を提唱するなどして中心的な役割を担ってきた。材料科学研究において複数の協会賞を受賞するとともに、近年では環境省環境保全功労者表彰のように環境に関する活動にも高い功績が認められており、基礎研究において十分な実績、見識があるだけでなく、地球環境問題に対しても高い先見性と洞察力を有している。また、国際連合大学 副学長を務めた経歴からも、本研究領域で特に必要とされる国際的視点も兼ね備えていると見られる。

研究においては、文部省 科学研究費重点領域研究「人間地球系」総括代表をはじめとしたマネジメントの実績があると同時に、多数の学会、協会等の要職も歴任しており、研究者コミュニティからの信頼も広く集めている。さらに、CSTP 基本政策専門調査会 分野別推進戦略 PT 環境メンバー、総務庁行政改革本部規制改革委員会 参与、科学技術会議「21 世紀の社会と科学・技術を考える懇談会」専門委員、日米科学技術対話「21 世紀の社会と科学技術」コアメンバー、文部科学省科学技術・学術審議会技術・研究基盤部会臨時委員、総合科学技術会議環境イニシアティブ(ごみゼロ、化学物質)専門委員等、日本の環境技術政策の中心的役割を担ってきており、日本が目指すべき環境技術を広い視点から俯瞰してマネジメントできる経験・能力を有していると見られる。基礎研究の高い見識を持ちながら、日本だけでなく世界が目指すべき環境政策への広い見識を持つことは、幅広い対象を持つ環境技術研究のマネジメントには必須であり、同氏の強みと言える。

こうした実績を総合すると、当該研究領域について先見性及び洞察力を有しており、適切な研究マネジメントを行う経験、能力を有していると共に、関連分野の研究者から信頼され、公平な評価を行っていると見られる。

## 研究領域 「アレルギー疾患・自己免疫疾患などの発症機構と治療技術」(CREST)

本研究領域では、免疫反応全体の制御に着目し、統合的に免疫細胞の働きを利用した医療技術の開発を行うことで、ヒトのアレルギー疾患や自己免疫疾患を予防・診断・治療することなどに貢献できる研究を対象とする。

花粉症をはじめとするアレルギー疾患は国民の QOL を低下させるとされ、社会問題となって久しい。また、その他免疫機構に由来する自己免疫疾患などの中には重篤な場合、死に至るものもあり、現代医療の大きな課題である。我が国において、これら免疫疾患の克服に向けた研究が展開され、すでに制御性T細胞などの免疫制御細胞の量と働きを操作する技術や粘膜免疫系を介した免疫制御技術の基礎研究は、すでに世界的に注目されている。研究代表者の下、免疫応答の全体バランスを正常かつ安定に保持させる高度な免疫制御技術を臨床応用に向けて研究チームで推進していく。

本研究領域において、これまで世界的にもトップクラスにある我が国の免疫学の基礎研究を臨床応用へとつなげていくことは、関連する分野のポテンシャルそのものを高めることとなり、萌芽的研究の顕在化と育成にもつながり、ひいては、花粉症をはじめとするアレルギー疾患や自己免疫疾患を中心とするヒトの免疫疾患を予防・診断・治療する我が国発の「免疫制御医療」を創出するブレークスルーになることが期待される。従って、本研究領域は戦略目標の達成に向けて適切に選定されている。

我が国では、アレルギー・自己免疫疾患などの免疫疾患研究は、全国各地の大学の免疫学教室を中心に、多様な周辺研究領域と連携しながら展開されてきた。また歴史的にも、北里柴三郎による破傷風菌の抗体発見に始まり、石坂公成による IgE 抗体の発見、さらに近年では種々の免疫系サイトカインの同定単離や制御性T細胞の発見、Toll 様受容体などの自然免疫の仕組みの解明など、世界的にすぐれた研究が多く日本人の手によってなされてきた。また、最近、これまでの基礎的研究から臨床を視野に入れた応用研究への展開に対する意識も高まっていることから優れた挑戦的な研究提案が多数見込まれる。

## 研究総括 菅村 和夫

菅村和夫氏は、生体免疫系の制御機構を分子レベルで捉え、それらの破綻を原因とする種々の免疫疾患の発症機構の解明と治療法の開発を進めてきた。これまで、X連鎖重症複合免疫不全症の原因遺伝子として今日知られているサイトカイン共通受容体  $\gamma c$  鎖を単離し、同疾患の分子診断と遺伝子治療への道を拓いてきた。その一連の業績の中の「X連鎖重症複合免疫不全症(XSCID)の病因遺伝子単離と分子診断法の確立」により平成7年には第32回エルウィン・フォン・ベルツ賞を、「サイトカイン共通受容体  $\gamma c$  鎖と XSCID」により平成11年には第16回持田記念学術賞を受賞した。また近年では、免疫性難病とされる炎症性腸疾患の自然発症モデルマウスを樹立し、発症感受性遺伝子座の同定と発症制御の研究を展開している。

また、2004年より東北大学大学院医学系研究科長・医学部長を、2006年より東北大学副学長としてライフサイエンスの研究と教育の発展に尽力すると同時に、東北大学病院内の「未来医工学治療開発センター」の設立、東北6県の6大学による「東北地区TR拠点形成ネットワーク」の構築に貢献するなど大学内外でマネジメント手腕を発揮している。

さらに、日本免疫学会、日本ウイルス学会等の関連諸学会においても理事・評議員など要職をつとめている。

これらを総合すると、当該研究領域について先見性および洞察力を有すると同時に、マネジメントを行う経験、能力を有し、あわせて関連分野の研究者から信頼され、公平な評価を行いうる人物と見られ、本研究領域のように研究チームで研究を推進する総括として適任と考えられる。

## 研究領域「脳情報の解読と制御」(さきがけ)

本研究領域は、基礎的な脳の動作原理に迫る基礎研究への展開と、理解を背景とした重要技術の開発の両面から、運動・判断の脳内情報を利用するための革新的要素技術を創出する研究を対象とする。神経科学の急速な進歩により、脳の情報処理が明らかになり、ブレインマシンインタフェース(BMI)、ニューロリハビリテーション、ニューロマーケティング、ニューロエコノミクス、ニューロゲノミクス、ニューロエシックスなど、社会に大きな貢献をすることが期待される応用分野が育ちつつある。本研究領域は、神経科学の基礎的研究と上述の例を含む様々な応用分野をつなぐ探索的研究と革新的技術開発を対象とし、戦略目標の達成に向け適切に選定されている。

本研究領域は、脳科学とその応用分野の広がりに対応して、計算・実験神経科学、工学、臨床医学、生物学、社会科学、人文科学、情報学など多方面の研究者が互いに交流、啓発し、研究に取り組むように門戸を開いていることから、幅広い分野から多様な研究の応募が期待されるように選定されており、優れた研究提案が多数見込まれる。

### 研究総括 川人 光男

川人光男氏は、脳科学において、理論と実験を組み合わせる様々な業績を上げ、最も顕著な業績として、運動制御と高次認知機能に重要な役割を果たす小脳に、身体の一部、道具、他人の脳などの機能をまねる神経回路が学習によって獲得されるという「小脳内部モデル理論」があげられる。また、最近では ICORP「計算脳プロジェクト」において、世界で初めて、サルの大脳皮質の活動により制御されるヒューマノイドロボットの二足歩行に成功するなど、幅広い分野において優れた業績があり、本研究領域において必要な、先見性・洞察力を有していると見られる。

また、現在(株)国際電気通信基礎技術研究所脳情報研究所所長を務めており、本研究領域について、適切なマネジメントを行う経験・能力を有していると見られる。

また、日本神経科学会理事を務めていることから明らかなように、当該分野の研究者からの信頼も厚く、その一方で、若手研究者育成の場を作ることを第1の目的としている『「脳を活かす」研究会』の発起人代表の一人でもある。これらを総合すると、本研究領域のように多くの若手研究者の応募が見込まれるさきがけ研究領域の研究総括として適任と思われる、関連分野の研究者から信頼され、公平な評価を行いうると見られる。

## 研究領域「知の創生と情報社会」(さきがけ)

本研究領域は、多様もしくは大規模なデータから、有用な情報である「知識」を生産・活用するため基盤的技術の開発と、その基盤的技術で生み出された知識を実社会で活用するための研究を対象とする。

大規模データを処理するための革新的な技術、統計数理科学を応用した相関分析技術・モデル化技術、あるいは、実社会から得られる多様なデータを構造化・時系列分析して知識を抽出する技術、センサやシミュレーション結果等の複数のリソースから新たな知識を創出する技術など、自由で創意に満ちた発想に基づく研究を推進する。それらにより本研究領域には、単なる要素技術の高度化に止まることなく、応用分野における現実の課題の解決に資する知識の創出をもたらす基盤技術の萌芽的成果を期待する研究提案が見込まれ、戦略目標の達成に向けて適切に選定されている。

また、情報科学、統計数理科学などの分野の研究者が集まることにより、従来にない新しい技術分野及び研究者コミュニティが形成されることなどが期待される。我が国の世界における位置づけについても、すでに関連プロジェクトが推進中の欧米諸国や、急速にこの分野での研究で追い上げを進めている中国、韓国に対する国際的な競争力を培うような、様々な分野からの優れた挑戦的な研究提案が多数見込まれる。

## 研究総括 中島 秀之

中島秀之氏は、産業技術総合研究所においてサイバーアシスト研究センター長として、人間中心の情報社会の実現に向け、デバイスからソフトウェア、コンテンツにいたる広範囲な研究開発を推進し、モバイル端末や空間光通信による位置同定システムなどを開発、プロジェクト成果である無電源情報端末が実際に愛・地球博の日本政府館で使用されるとともに、経済産業省から2006年度グッドデザイン・エコロジー賞に認定されるなどの実績を持ち、本研究領域について先見性・洞察力を有していると思われる。

現在、公立ほこだて未来大学の学長として、函館市や秋葉原を対象とした情報処理技術の社会応用実験を推進して社会の改革を行うとともに、教育、若手研究者育成ならびに情報処理研究の方法論確立と社会応用に全力を傾倒している。函館市と協力して情報処理技術社会応用の場として研究を推進するとともに、東京サテライトを秋葉原に置き店舗等と協力する中で社会応用実験を進めているなど、基盤的技術と情報社会を支える応用技術の研究を総合的に推進する本研究領域について、研究課題の効果的・効率的な推進を目指し、適切な研究マネジメントを行うことができる豊富な経験と高度な専門知識を持ちあわせていると思われる。

さらに、人工知能学会理事や日本ソフトウェア科学会理事、日本認知科学会会長、情報処理学会理事、情報処理学会副会長など学会等においても要職を歴任している。

以上を総合すると、さきがけ研究領域の研究総括として適任と思われ、関連分野の研究者から信頼され、公平な評価を行いうると思われる。